言すれば如是体を釋し畢りぬ。されば吾人はかくの如き本体を會得して、更に十二因緣世界生滅苦樂の相を觀察すれば如何にや。十二因緣の目は說明するの要なかるべし。されど十二因緣は、苦●集の作用を然かく分類したるものなるのみは說き置くべし。而して宇宙の本体上說の如しとせば、その本体より見たる是の苦●集の世相云何。是れ耳を欹つる價なしとせず。而して之を論ずるもの本項の目的なり。姑く玄義の本書に是が說明を求めんか。曰く、

大經云。十二因緣。名爲佛性者。無明●愛●取既是煩惱。煩惱道即菩提。菩提通達。無煩惱。煩惱既無。卽究意淨。了因佛性也。行●有是業道。卽是解脫。解脫自在。緣因佛性也。名色●老●死是苦道。苦即法身。法身無苦無樂。是名大樂。不生不死。是常正因佛性。故言無明與愛。是二中間。即是中道。無明是過去。愛是現在。若邊若中。無非佛性。並是常樂我淨。無明不生。亦復不滅。是名不思議不生不滅十二因緣也。（玄義二五十五丁）

と。煩惱道卽菩提と云ひ、業道是解脫と云ひ、苦道即法身と云ひて、三道卽是三德なる事を論じて、即ち是れ三因佛性なる事を說けるものなり。更に他の言語を以て說明すれば、宇宙の本体、實相の上に昇つて現象界を眺望するに、煩惱と云ひ苦と云ひ、樂とし

て法性より區別すべきものなく、平等一味たゞ實相の實在するのみとして、菩提に通達すれば復煩惱なしと說破せるものなり。即ち三道として捨つべく、恐るべく、解脫すべきものなし。皆法性●實相の相に過ぎずと說くものなり。說明の通達徹底せる、靜夜竊かに味ふて知るべきのみ。

第四無作四諦　十二因緣は世相の狀態を記述したるものなり。而して其の同一事を再び哲學的に說明したる、是を四聖諦となす、されば不思議の十二因緣は、實相本體の上よりして觀じたる一種の世相觀なりき。而して世相の苦●集、即ち是れ菩提●法性の實相なりと論じたるものなり。然るに今、四聖諦にありては其の哲學的解釋を施して、學問的に之を說明し、更に出世の因果を說て、之を解脫すべき最後の方法を說き示したるものなり。故にその說明たるや至つて明晰を極む。されば今如是體、即ち實相の本體に立脚して苦●集を解脫すと云ふ、その相如何。例の方法に順じて先つ本書の文を引て說明に更ゆべし。曰く、

無作者。迷中輕故。從理得名。以迷理故。菩提是煩惱名集諦。涅槃是生死名苦諦。以能解故。煩惱卽菩提名道諦。生死卽涅槃名滅諦。即事而中。無思無念。無誰造作故名無作。（玄義三四丁）

と。由是觀之　煩惱即菩提にして菩提卽煩惱、生死卽涅槃にして涅槃卽生死なり。たゞ菩提と煩惱と異り、涅槃と生死と異る所以のものは迷理のみ、作用を異にするのみ。豁然として夢醒むれば一の實相なりしのみ。卽ちその本體は一にして二ならざりしなり。故に生死卽涅槃●煩惱即菩提と說く事を得るなり。それたゞ一なり。故に煩惱●生死の事相に卽して中なり。然るに衆生思念するが故に或は煩惱と見、菩提と見、或は生死を悲み涅槃を喜ぶ、彼等の思念する既に誤れるなり。宇宙の本體、實相には思なく念なし。何ぞ煩惱●生死あらんや。既に煩惱なく生死なし。また何ぞ、菩提あり涅槃あるの理あらんや。故に卽事而中。無思無念なり。又方に何人の造作思慮をも用ひず自然天然の唯一實相絕待なり。是れを以て煩惱の滅すべきなく生死の解脫すべきなし。故に之を無作とは云ふなり。

第五圓敎二諦　十二因緣は漠然たり。四諦は廣くして共に一目瞭然たらしむるは不適當なり。故に之を要略して二諦となす。それ二諦とは、眞諦●俗諦なり。而して前の四諦は世、出世の二法に渡り、苦●集の二諦は世間の因果にして、道●滅の二諦は出世間の因果なり。今苦●集の二を取て俗諦となし。道●滅の二を取つて眞諦となす。所詮は迷を俗苦となし、覺を眞苦と云へるものと知るべし。而して是等二者の關係は、前述四諦の時の說明を見て端摩する事を得ん。されど再び之れが說明をなすべし。曰く、

圓敎二諦者。直說不思議二諦也。眞卽是俗。俗卽是眞。如々意珠。珠以譬眞。用以譬俗。卽珠是用。卽用是珠。而二不二。分眞俗耳。（玄義三十七丁）

と。眞俗二而不二なる之れを圓敎の二諦となすなり。更に眞とは何ぞ俗とは何ぞ。曰く、

明二諦者。取意存略。但點法性。爲眞諦。無明十二因緣。爲俗諦。於義卽是。（玄義三十二丁）

と知りぬべし。但點法性を眞諦となし、無明●十二因緣を俗諦となす事を。而して更に上說に照合して知りぬべし。眞●俗二而不三なるを以て煩惱卽菩提●生死卽涅槃の理を詳說し、今二諦を明かして無明卽法性の理を說きつゝあり。首尾一貫して同一事なり。只だ實相の本體を示せるものゝみ。多く云ふを要せじ。

第六中道諦　夫れ實相を說明するに二諦の目を用ひて之れを說明すれば、恰も眞●俗併立して二元的のものなるが如く見ゆ。故に二諦の外に更に中道諦を建立して、二而不二の義を彌明確ならしめんとするもの、是れを三諦の說となす。三諦の說明は今更その要もなかるべし。だゞ三諦卽一中道の義を明かにすべし。曰く、

三諦者。非但中道具足佛法。眞俗亦然。三諦圓融。一三三一云云（玄義三十六丁）

更に曰く、

壽量云。非如非異。卽中道如卽眞。異卽俗（玄義二十五丁）

と。三諦の說、明かなり。

第七一諦　實相の一實體なる事を說かんとして、反て三の數を用ひ、聊か混亂する所ある如し。故に更に一諦の目を用ひて之を說明せんとするに至れり。されば三諦說は大乘の意なるにも拘らず、尙ほ空●假の二諦、方便の說を相ひ併べたり。故に今は空●假の二諦〻中道一實體に收めて、唯一法なる所を特に說明したるものなり。

第八無諦　されど實相は尙ほ一諦と說くも非なり。何となれば一諦と限るべき有限のものにあらざればなり。故に無諦と說てその絕待なる事を示したり。文に曰く、

諸諦不可說者。諸法從本來。常自寂滅相。那得諸諦紛紜相礙。一諦尙無　諸法安有。（玄義三二十七丁）

又曰く、

一一皆不可說。可說爲麤。不可說爲妙。不可說亦不可說是妙。是妙亦妙。言語道斷故。（玄義三二十八丁）

と。かくして吾人は諸種の學說に付て實相の如何なるものなるかを說明し得たり。學說は諸種なりと雖、其は意見の異るのみにしてその事實、卽ち具體的事實に至りては一なり。一事實の說明にかく種々の說き方を得たるなり。換言すれば、一實相を說明せんとして諸方面より立論したりと云ふまでなり。故に前に立ち戻りて玄義八の文を引て誤なからしむべし　曰く、

正顯正體者。卽一實相印也。

と。

されば吾人は天台の根本概念實相の義を說明せんとして、八項に分類して之を說きたり。然りと雖斯くの如きは單に客觀を中心としての立論、卽ち境妙の方面よりして實相の內容を示したるに過ぎずして、是のみにては其の說明不充分なりと謂ふべし。何んとなれば實相●根本概念は主觀●客觀を超越せるものなれば、豈にたゞにその說明を境妙、卽ち客觀的方面にのみ限るべきの理あらんや。更に智●行等、主觀的方面よりも論ぜざるべからざればなり。故に是等兩方面より立論し、一諦●無諦、常自寂滅相の不可說々々々境に到達し得てこそ說明の完全と云ふべけれ、然るに今玄義八の文に依據して說明を是のみに限る所以のものは、蓋し境妙の說明は根本概念の說明に最も近くして、且つ便利なればなり。故に天台も顯正體として是れを列擧したるものなるべし。

然りと雖吾人は説明の完全を欲するが故に、更に二三の説明を附して是れが補充をなすべし。

姑く主觀の方面に眼を轉じて、超主觀の妙境を觀察せんか。先づ吾人は智識の最上なるもの奈何の問題に到達すべし。而して吾人は之を得たり。何ぞや。曰く圓教の四智是れなり。されど單に四智と云へば、稍廣汎に失するの嫌あり。故に吾人は更にその中にて最上なるものを求めざるべからず。而して吾人は姑く之を妙覺智となすべし。妙覺智とは何ぞや。既に等覺の位にありて四十一重の無明の惑を斷じて、四十一品の中道の理を證し、等覺一轉入于妙覺の最尊無上智是也。智光圓滿の覺體にして、あらゆる一切の諸智を一念に收むること恰も十五夜の月の如し。それ既に圓滿なりと云ふ。圓滿なれば向上進歩の諸智は云はずも更なり。下落惡趣の諸智をも含有せざるべからず。十五夜の月の光明中には前十五日の月光を攝收すると同時に、後十五日間の暗夜の光明をも含畜せざるべからず。圓教最尊の智亦復此の如し。妙覺極果の智の法體中には、一切法性の功德を具足するのみならず、無明煩惱の惡智をも具足し居るなり。故に之を一面より見るときは殆んど智ならざるが如き感ぞせらるゝなれ。宜なり。智なきに至れるを最上智となすものなり。

吾人は先きに客觀的方面より立論して、無諦を以て實相の眞相となすと云へり。今又等しく無智なりと云はんと欲す。姑く前に立ち戻つて論ぜしめよ。

抑も天台大師の智妙を論ぜんとするや、智を分類して二十智となし、之を一々境妙の下の六科の境に配當して評論すること至れり盡せり。就中注意すべきは三諦に相ひ對峙せられたる三觀智、一諦に相ひ配當せられたる如實智云なるべし。されど吾人は煩をさけて今は如實智のみに付て説明を下さんのみ。他は推して知るべし。曰く、

對一諦明智者。卽是如實智也。釋論云。諸水入海。同一鹹味。諸智入如實智。失本名字。故知如實智。惣攝一切智。純照一境。故惣衆水。俱成一鹹也。

（玄義三八十三丁）

と。蓋し如實智とは、要するに妙覺智なり。その説明は前に明すが如し。衆智を攝收して同一鹹光たり。常に諸法實相を照して平等一味なり。又曰く、

無諦無説者。既言無諦、亦復無智（玄義三八十三丁）

又曰く、

玆以杜口絶言無諦無智者。亦無麁無妙。無待無絶。歴一切法、皆無麁無妙也。

（玄義三八十四丁）

と。既に諸智一智なりと云ふ。亦復無智と云ふべし。すでに無智なれば杜口絶言、諦●智共になかるべし。從て麁なく妙なく、待●絶の識別すべきなし。念々皆無に歸して其所に如實の眞智顯現すべし。之を絶待實相の妙覺智となす。主觀の方面よりして絶待を說く事かくの如し。

されば吾人は絶待を說示するに主觀●客觀の兩側面より之を述べたり。是れ蓋し實相は常にかくの如く展轉相照して境●智相ひ平行せるものなればなり　姑く下の一文に徵して之れを一瞥せよ。詳しき事は略焉。

一如實智。是照佛界十如性相。又是照不思議十二因緣。又是照無作四諦。又是照五種眞諦。又是照五種中道第一義諦。（玄義三八十七丁）

又曰く、

無諦無說與十相性如合。與不思議十二緣滅合。與四種不生不生合。與眞諦無言說合。與中道非道非生死非涅槃合（玄義三八十七丁）

かくの如く境●智相對合して、諦は諦を絶し、智は智を絶して絶待なり。換言すれば、常境は無相、常智は無緣の境を云ふなり。故に無緣にして緣ずるが故に三觀にあらざる事なく、無相にして相なれば三諦宛然なり。境●智は畢竟一如にして圓融無碍なり。之れを

名づけて實相の正體となす。文に曰く、

如是等諸智。傳傳照諦。　若融。智即融。智諦融。名之爲妙（玄義三八十七丁）

と。げに妙ならずや。今や智諦融じて智なく諦なく、實相絶待の一事實となるに至りぬ、吁ゝ、吾人も亦玆に至りて遂に口杜ぐんで云ふ能はず。胸堰いで筆轉た運らすに由なきに至りぬ。不可說々々々と口ずさみて本章を終へんかな。

第二十二章　天台根本概念の內容（其の二）

吾人は前章に於て、既に天臺の根本概念の內容を說明せんとして、諸種の學說を擧げてその內容の如何なるものなるやを彷彿せしめんとせり。然れども前章の說明のみにては、單だ混雜を極むるのみにして、未だ其が內容を明確に意識するに難かるべし。故に本章に於ては聯か分析の方法を異にし、裡面に立ち入つて其が內容を說明して了解に便ならしめん。

されば根本概念の說明を、內面に立ち入つて試みんとしたるものゝ嚆矢を尋ぬれば、六祖荆溪にありと謂ふべし。荆溪湛然は法花玄義を註して釋籤を著すや、十妙を說明したる後に於て十不二門を立て根本概念の說明に當りぬ。十不二門とは何ぞや。十門を建立して根本實在の不二不別、具體的の唯一實在なる事を痛論したるものにして、天台の根

本概念を了解せんとするものに取りては、恰好の註書と云ふべし。

今吾人は天臺の概念の内容を説明せんとするに當りて、姑く妙樂の分類に順じて之を説明するを便なりとなす。雖然、妙樂の分類は多きに失し、宗教的側面、倫理的側面にまで論及し居るを以て、吾人は既に序論に於て、吾人が研究の範圍を限定せしが如く、今も亦妙樂の説を限定して、單に純正哲學的側面に關するものになし、宗教●倫理的の側面は或は之を後篇に讓り或は之を全然省略する事とはなしぬ。蓋し我が研究と符合せざるを以てなり。而して更に斷り措くべき事あり。何ぞや。曰く、吾人は妙樂の説に依りて、彼の分類を襲用しつゝありと雖、尚彼の説明をそのまゝ用ひざる事是なり。されば何故に吾人は妙樂の説明を用ひざるや。注意に價なしとせず。乞ふ姑く之を辯せしめよ。

吾人が妙樂の説明を排して之を用ひざる所以のものは、妙樂は天臺の説を天臺の云ふがまゝに了解し得ざりしを以てなり。換言すれば、妙樂の見たる天臺學にして、天臺學そのまゝの天臺學的説明ならざるを以てなり。云何にして之を知るや。曰く、吾人の見る所を以てすれば、妙樂は天臺の説を誤解し、彼が根本概念を唯心論的傾向を以て説明せんとしたるが如き形跡歴然として看取し得らるればなり。蓋し妙樂は時代精神の影響の下に、起信論及び花嚴學所説の眞如説、卽ち唯心論的の傾向を帶びたるものなり。故

に天臺の根本概念、絶待實相を説明せんとするに當りても。亦此の立場より解釋を施したるものなるが如し。故にその説明や往々にして不徹底の觀なき能はず。是を以て吾人は彼れの説を用ひざるなり。聊か他分の事に屬すれども後世、山家●山外の學爭の基礎は既に妙樂に萠芽せりと謂ふべゞ、而して山外の説は正しく妙樂にその根底を有するものなるが如し。而して此の義幾多の證據を要する事なれども、今は之を立證するの要もなかるべく、又吾人が目下の能ふ所にあらざれば、後日を俟たんのみ。

されば吾人は妙樂の説明を用ひずと雖、其の分類のみは依用せんと欲するものなり。

妙樂云く、

一者色心不二門。二者內外不二門。三者修證不二門。云云

と。而して是の三門は正しく哲學的側面より立論せるものと云ふべく。他の七門は或は倫理的或は宗教的側面よりして立論せるものなれば、今吾人は單に是の三門のみを假りて吾人の説明を加ふべし。妙樂は語を續けて曰く、

是中第一從境妙立名。第二第三從智行立名。

と。是に由て其の內容を考ふれば、色心不二門は境妙に依て根本概念、絶待實相を説明せるものなるべく、內●外不二、性●修不二の二門は智●行の二妙に依て同じく是が説明を

試みたるものなるべく、吾人も同一根據に立つて之れが説明を施すべし、

先づ第一に色心不二門、本體論的側面より之を説明せんか。前章に於て既にその名目を列ねて大體の説明をなしたるが如しと雖、之れを惣括して論ずるときは、宇宙の諸現象は惣て物●心兩方面に分析することを得べし。是れ佛敎たると、儒敎たると、道敎たるとに論なく、東洋の哲學も、西洋の哲學も、皆共に大問題としてその解決に當りつゝあるものゝ分類なればなり。而して或は之を二元論的に解して、平行を説くあり、或は之を一元的にせんとして、心を以て物中に攝せんとする唯物論者あり。或は物を心中に收めんとする唯心論者ありて迭ひに爭をなす事、恰も修羅と帝釋の如く、幾歲月を經と雖未だ一定するの傾あるを見ざるなり。然るに今天臺の説を見るに、天臺の學説は是等唯物●唯心の兩説を超越して、更に根本的なる絶待實相なる第一原理を假定して、之れを遺憾なく説明し盡せり。故に是の絶待は唯物と云ふも非なり、又唯心と云ふも非なり。而して同時に物ともなれば心ともなるべき圓融無碍の妙境なり。さればにや是の根本絶待を名づけて唯物と解せんか。世界に心現象の現存するを奈何せん。又之を唯心と解せんか。等しく物的現象の實存するを奈何せん。然らば物心二元論なりと説明せんか。忽ちにして物●心兩元素の關係交渉論に至りて難點を生じ來るなるべく、ついに是等の言語を

以てしては解釋し得べからざるに至るべし。是を以て天臺は是等總てに可能なる、而も何れにも偏倚せざる原理を求めんとして、根本概念、實相の妙境を立つるに至れるものなり。故に之を物と云ふべからず、心と云ふべからず。畢竟、物●心不二の包括的一元論者なり。絶待論者なり。

次に之を認識論的側面。即ち内外不二門の方面より論ぜんか。宇宙は萬象萬差にして無數の對立をなし、就中其の根本的なるを主觀●客觀の對立となす。今内●外と云へるものは、正しく此の主觀●客觀を指せるものにして、天臺の根本概念は是等内●外を絶して、不二融即の絶待なりと云へるなり。換言すれば、本體論に於ける絶待の妙境は、智に依て可能なるべく、智は一念にして一念無念なり。又方に絶待なるべし。外は既に絶待なり。而して内も亦絶待なり。絶待に二あらんや。無二無別、内●外超越の絶待實相とはなりてけるなり。之を内外不二●認識超越門となす。

更に之を第三修性不二門より説明せんか。修性門は道德的側面にして、此の場合に於ける道德は所謂道德の根底論とも云ふなるべく、吾人の所謂實踐哲學的側面、即ち道德の理論的、哲學的側面の説明なり。今此の道德學的側面、即ち修性不二門より論ずれば、道德の始めをなすものは道德の最後にして、修と性との別なき事を説明せるものなり。詳

論すれば、天臺の道德說は只その本性を發揮するにあーて、本來は佛性常住なり。その常住實在の佛性を發揮すれば、修の能事畢ると說明するものなり。換言すれば、宇宙絕待の妙境は、本來本有の存在にして、吾人の如何ともする事能はざる所に屬するものなれば、吾人は須らく妄念を去つて其の絕待境を悟得せざるべからず。是を以て道德卽ち修の理想となすと。かゝれば修●性不二の絕待境なり。卽ち性も絕待なれば修も亦絕待なり。絕待々々にして不二なり。是れを道德の理想、修性不二門となす。詳密なる事は後編に至りて知りぬべし。(本研究は時間の都合上缺之。)

以上吾人は稍學術的に其の內容の說明を試みたり。語至つて簡なりと雖、意彌〻深く、之を考察し冥想して益〻幽邃なる事を覺ゆ。故に上の說明語簡單なるの故を以て直ちに之を退くべからず。又以てその堂奧に到るに門となすに足らんか。夫れ物●心超越の本體論と云へば、直ちに宇宙の本體、世界統一の根本原理を想像するなるべく、而してその內容、物●心を超越せりと云ふに至りて、思ひ半に過ぐるものあらん。而してその本體たるや、吾人凡夫の見たるがごとき偏情的、近親的の皮相的の實在にあらずして、さらに更に圓融無碍の統一的、根本實在なるなり。換言すれば、主●客の對立を假定して、成立せるがごとき根底薄弱なる實在にあらずして、主●客對立の認識的形式を超越せる、卽ち

內●外不二の絕待たるなり、以て認識論上如何なる位置に存するものなるやを知るべきなり。西洋哲學者ウント氏の絕待說と雖、尙此の羈絆を擺脫する難かるべし。而してかくの如き絕待なれば之れを倫理、道德の問題に及ぼしては云何、之れ修性不二門の下に說ける所にして其の意明かなり。故に天臺の根本概念は此の三門の說明を以て足れりとなすべし。換言すれば、是等三門の概說よりして、說明法は假令ひ概說なれども、その奧に存する根本實在の內容を想像するに難からざる事を信ずるなり。城內の太なるを見て城主の如何を知るべし。

第二十三章　根本實在の超越性

上來吾人は數章に亘りて、根本概念の內容を說示し來たれり。故に略その概念の如何なるものなるかは積極的に知り得られしならん。されど吾人の說明し得たる所以のものは、若しくば解說し得られし所以のものは、單に概念に過ぎずして實相そのものに非ず。單に名相を解し得たるまでにして、未だその實體に到達したるものにあらず、されば吾人は是の義を充分會得し置かざるべからず。げにや吾人の了解し得たるものは、是れ實相たり宇宙の根本實在なりと執着すべからず。是れ充分に注意を要すべき點なりとなす。何者吾人の了解し若しくば說明し得られし所以のものは、因緣あるが故に說く事を得べ

してふ、假定的前提の上に立てるものなればなり。卽ち吾人は或る因緣を得て說き得しまでにして、因緣を去れば吾人の說も亦同時に滅すべきものなればなり。卽ち吾人の所說破壞さるべきものなればなり。故に知るべし。吾人の說明し得たる所以のものは、因緣に依り、方便を得て說きたるものにして、實相そのものに非る事を。

實相はそれ破壞し得らるゝが如き言語の、關與し得らるゝ所にあらざるなり。玄義八に云ふ、

其一法者。所謂實相。實相之相。無相不相。不相無相。名爲實相。此從不可破壞眞實相名（玄義八五十丁）

と。破壞すべからざる眞實の實相なれば、言語を以てすべからざる事明かなり。是れ言語は相待的、變化的、一時的のものなればなり。其の故何ぞや、言語は其の性質假りの表號にして一國一部族に限られ、而も時代と共に變遷してその意味を變轉する事限りなく、日本語の近き支那、朝鮮に於てすら了解されざるが如く、而して上代の言語と明治の今日の言語と相ひ去る遠きを見て以て知るべし。況や一國の言語は同一人類中だにも行はれずして、何ぞ草木禽獸の十界に共通するを得んや。然則何ぞ宇宙法界に遍滿して、常住無差別の實相に比較するが如きは得て望むべからざる所に屬す。且つや實相は無相

不相にして吾人の心慮にだにも及ばざるものなるに於てをや。

實相は言語を絕すると共に、又心慮を滅するものなり。文に曰く、

今法界淸淨。非見聞覺知。不可說示。文云。止々不須說。我法妙難思。止々不須說。卽是絕言。我法妙難思。卽是絕思。又云。是法不可示。言辭相寂滅。亦是絕歎之文。（玄義二三十七丁）

と。云何に此の實相の法は思慮を絕せるやを見よ。蓋し吾人の思慮は常に偏頗なるを脫れず。常に物に執着するの習慣を有す。萬事を自己化して、自己の情緖に順じて說明せんとするものなり。故に佛はその妄情を破して云へるあり。

壽量品云。不如三界見於三界。非如非異。（玄義一十丁）

と。天台之を釋して、蓋し三界の人は三界を見て異となし、二乘の人は三界を見て如となし、菩薩の人は三界を見るに亦如亦異なりと云へり。蓋し實相に對する一般心慮の非なる事を云へるものなり。實相は非如非異にして吾人の相待的主觀の判斷し得らるゝ所にあらず。換言すれば、心慮の浮び來る所に實相あるにあらす。要するに實相は心慮を絕したるものなり。故に曰く、

僑陣如比丘。最初獲得眞實之知見。寂然無聲字。身子云。吾聞解脫之中。無有言語。

中略 淨名杜口。大集無言菩薩。不可智知。不可識識。言語道斷。心行亦訖。不生不滅。中略 大品句句悉不可得者。不可得者。不可以身得。不可得以心得。不可以口得。中略 此經明止止不須說。我法妙難思。是法不可示。言辭相寂滅。不可以言宣　非思慮分別之所能解。中略 不可說。故名聖默然。(玄義一五十丁)

と。二乘●三乘佛に至るまで言語を以て說くべからず。又智識を以て知識すべからず。言辭の相寂滅して言說の說くべきものなし。故に聖人すら猶默せざるを得ざるの境に達せり。況や淨名に文殊口を杜し默然せざるべからざるに至れりしも亦所以あるなり。實相は無相不相にして言語道斷心行所滅の境なり。請ふ次に進で其の理由を辯明せん。

抑も實相の言語を絕し心慮と超越せる所以のものは、本來實相は絕待にして吾人の所謂論理的實在なれば、主觀的相待的の認識を超越して言語思慮等に支配さるべきものにあらざればなり。主觀なく客觀なく、平等一如にして何等の妄念の着すべきなければなり。玆を以て實相は言語を離れ思想を超えて、超判斷の裡に實在するに至るものなり。

されば言語は思想の表號又は記號にして、思想の外面に表白されたるものなれば、言語となりて表はるゝ時は、必ずや何等が思想の形式を經由せざるべからず。從て今實相は言語を絕せるものなる事を述べんと欲すれば、勢ひ思想を絕せるものなる事を述べざるべからず。而して實相は思想を超絕せる事を論じ畢れば、同時に言語を絕せる事を論じたるものとして見る事を得べし。是れ蓋し言語は思想に異ならざればなり、故に吾人は思想に付て更に一言する所あるべし。

思想とは精神の系統の高潮して識域上に顯れ、何等かの形に於て自ら意識されたるものを云ふ。換言すれば刺戟の內界よりなると、外界よりなるとは置て問はず、對境として精神を刺戟し、意識上に現れ來る時の狀を名づけて思想、若しくば心念●心慮等と云ふなり。ゆへに精神作用が思想となりて作用せる時に於ては、必ずや主●客の相待的對立を見、一は他を否定すると肯定するとを問はず。又その對立的智覺の眞なると妄なるとを問はず、認識の形をとりて顯現し來るものなり。約言すれば思想は相待性のものなり。而して今實相を見るに、實相は前にも屢〻述べしが如く、主觀●客觀を超越して認識の境を出で、只論理の極致にあるものなり。故に云何ぞ、實相は認識的、相對的の思想の圈內にあり得んや。況や、言語のよく之を象徵し得るあらんや。吾人の所謂實相は言語思慮を絕して、絕待の裡に實在なるものなりと云へるの意知りぬべし。細論に更ゆるに下の文を以てせん。

無得執文。而自疣害。論云。若見彼若。不見彼若。皆縛皆脫。文亦倒然。疑者云。

諸法寂滅相。不可以言宣。大經云。生々不可說。乃至。不生不生不可說。若通若別。言語道斷。無能說。無所說。身子云。吾聞解脫中。無有言說。故吾於此。不知所云。淨名云。其所說者。無說無示。其聽法者。無聞無得。斯人不能說。斯法不可說

（止觀一十三丁）

第二十四章　天台根本概念の批判的分析

吾人は前來數章に渡りて天台の根本概念を諸種の方面より論じ、根本概念は認識を超越せる宇宙の根本實在なる事を證明し、諸學說の最後にして議論の極致なる事を說明し來たれり。故に今は少し方面を轉じて批判的分拆を試み、根本概念そのものゝ堂奧に透入してその正體何物なるやに面接せんとす。されば順を逐ふて分拆し行く事左の如し。

一、根本概念は時間空間を超越する事

吾人は前章に於て根本實在の超越性を論じて、根本實在は言語思慮の及ぶ所にあらざるものなる事を云へり、即ち超越性を說明せるに通俗的解釋を用ひたり。されば今是れを少し哲學的に學術的に論じて、議論の筋を明確ならしめんか、吾人は時間●空間の形式を超越せるものなることを痛論せざるべからず。されば時間●空間は宇宙存在の經緯にして、宇宙實在の根據、認識起源の最初の形式なり。然るに天台の根本概念は、認識を超

越すると同時に此の時●空の形式をも超越し去れり。文に云く、

圓教點實相。爲第一義空。名空爲縱。第一義空即是實相。實相不縱。此空豈縱。點實相爲如來藏。名之爲橫。如來藏即實相。實相不橫。此義豈橫。故不可以縱思。不可以橫思故。爲不可思議法。即是妙也。

と。實相不縱と云ひ、實相不橫と云ひ、不可以縱思。不可以橫思と云へる以て知るべし。根本概念實相は時間●空間の形式を超越せるものなる事を。更に文に續けて曰く、

秖點空藏爲實相。空縱藏橫。實相即不縱橫。秖點空爲如來藏。空既不橫。藏那得橫。點如來藏爲空。藏既不縱。空那得縱。點實相爲空藏。實相非縱非橫。空藏亦非縱非橫。宛轉相即不可思議。故名爲妙。

と云ふ。蓋し實相は時●空に瀰橫して非縱非橫、宛轉相即、不可思議なるものなり。是を以て時●空の形式を假りて認識する事能はず。又時●空を以て規定する事能はざるものなり。

二、判斷を超越せる事

實相根本概念は豈に只に時●空を超越するのみにあらず、又方に判斷をも超越せるものなり即ち感覺的形式を超越せるのみならず又判斷の形式をも超越せるものなり。故に天

台は屢〻凡慮の及ぶ所にあらずとか、或は唯佛與佛の境にして不可說なりなど〻云へるを見る。以てその判斷以外にあることを知るべし。而して吾人の判斷は常に何れかに偏するものにして、云は〻判斷は部分的の性質を帶ぶるものなり〻從て實相の如き高廣なる全體を、判斷の形に顯すことは不可能なるべし。故に實相は判斷を超越せりと云ふなり。

三、不可能にあらず

されど實相は判斷を超越せりと云へるよりして、そは不可知的なりと直ちに即斷すべからず。實相は絶待的に不可知と云ふにあらず。只だ淺薄なる常識智の知る所にあらず、と偏狹なる凡智を排斥せるに過ぎず。實は佛智即ち公正なる智に依るときは、充分に認識し得と云へるなり。換言すれば、正確なる推論に依るときは知識し得らる〻と云ふなり。尙術語を以て云へば、因緣あるときは說く事を得べしと說明せるものなり。故に不可知的なりと斷定すべからず。かくて正確なる根據に立つときは、明瞭に推論し得らる〻が故に、實相の內容も亦明瞭に說明する事を得べし。要するに實相は判斷の形に於ては超越的なるも、推論の形に於ては推定し得らる〻所のものなり。何ぞ不可知と云ふを得んや。

四、實相は論理的歸結なる事

實相は時間・空間の形式を超越し、吾人の判斷を超越し、認識を脫して、思辯冥想の裡に推論し得らる〻のみ。論理的に推察し得らる〻のみ。故に實相は論理的歸結なるべしとなす。

されば上にも述べたる如く、吾人の認識は相對的にして常に一方に偏するものなり。空概念を經て實相に入るものは有を排斥し、有概念を以て實相に入るものは空を排斥して自己に親しきものを推して是なりとなし、自己に遠きものは反て眞理なるに關らず、之を排斥するは人情の常なり。人情と云はんよりは寧ろ認識の常途なりと謂ふべし。是を以て天台の所謂實相は、人情を離れ認識の偏頗を脫して、冷かなる理路を辿り、理智の光明に依りて其の當體に達せんとするものなれば、從て人情的、主情的のものにあらざるなり。故に天台はその情的判斷を避けんとして、

學妙有者。自稱至極。聞畢竟空。而生誹謗。不受其法。不耐其人。學畢竟空者。自類朋聚。引正向已。推邪與他。皆不識天主千名。聞釋提桓因而喜〻。聞舍脂天而恚。恭敬帝釋。慢辱拘翼。將恐其福。不補其失。實相亦爾。同是一法。豈可謗一信一耶

（玄義八四十六丁）

と云へり。就中、將恐其禍。不補其失と云へる誠に痛快ならずや、天主の千名を知らずして一を聞ては之を恭敬し、他を聞いては之を慢辱するは世間學者の常なり。學者往々火花を散らして論戰する事ありと云へども、仔細に之を檢するときは同一事實を互に認容しながら、言語に惑はされて相敵視するものなり。今實相も亦復此の如し。小乘●大乘の學者、常に實相に付て議論をなすものありと雖、何れも實相の一面を得て他を失し而して爭をなせるものなれば、眞實に實相を覺得せるもの、換言すれば主情的悟得を離れ、理智的に認識を離れて、論理的に之を悟れるものは、一を誘じ一を信じて可ならんや。二者三者皆可なりと認許し得らるゝものなるべし。此の境に達せずんば未だ悟れりとは云ふべからず。而して之れに達するもの一に論理的の理路のみ。

五、實相は具體的事實なる事

かく論じ來れば、宇宙の本體實相は極めて抽象的のものなるが如く思はるゝなり。されど實相の眞相は然らず至つて具體的なるものなり。何をか具體的と云ふや、云ふ所の具體的とは宇宙萬象を抱含して、一物をも餘さずてふ意義なり。見よ宇宙は冷朗透徹として一塵の穢なく、惡を去り染を去り陋を除ひて明皎々、理想的の眞如なるならんや。然か說明するものを吾人は抽象的說明と云ふなり。然るに宇宙は然らず。眞理の下には

必ず背理あり。妄理あり。審美の反面に陋相あり、穢相あり。而して天然自然に矛盾律の現存せるを見る。それ學德兼備の聖人の近所には必ず墮落放浪の無禮漢ありて穀傷事件を惹起し人生の慘憺を極めつゝあるにあらずや、而してかくの如きは宇宙の眞相にあらずや。宇宙を說明してかくの如しとするもの是を吾人は具體的說明とするなり。

今天台の實相は云何と云ふに、又是くの如き具體的事實を指せるものなるが如し。生物界は十段の區別ありて常に進化流轉限りなしと雖、十段は永遠に十段にして、決して生物界は一も殘らず三十二相八十種好の佛陀となり果つるてふ事あるべからず。數千年の以前にも地獄の衆生あり乃至佛界ありき。數千年後の今日も尙地獄の衆生は少しも減ぜず依然として存せり。果た恐らくば數萬年の後と雖、尙三途●六趣は本の如くに存して十界一も欠くる事なかるべし、而してこは有情界の過去にして又未來なり。永遠に十界は儼乎として存在するならん。既に十界は永久に存在すとせば無明●塵勞も亦永遠の實在なるべし。何となれば無明等は九界の屬性なればなり。無明既に實在なりとすれば生死も亦實在なるべし。無明●生死實在なりとせば染も實在なり。惡も實在なり。染●惡既に實在なりとせば、宇宙森羅何物としてか實在ならざるものあらんや。諸有の現象界皆實在なりと云はざるべからず。故に天台は、

圓頓者。初緣實相。造境卽中。無不眞實。繫緣法界。一念法界。一色一香。無非中道。已界及佛界衆生界亦然。陰入皆如。無苦可捨。無明塵勞。卽是菩提。無集可斷皆中正。無道可修。生死卽涅槃。無滅可證。無苦無集。故無世間。無道無滅。故無出世間。純一實相。實相外更無別法。法性寂然名止。寂而常照名觀。雖言初後無二無別。是名圓頓止觀(止觀一六丁)

と云へり。宇宙の森羅萬象既に實在なりとせば、何物としてか之を抽象し或は捨象し去るべきものあらんや。吾人の具體的なりと云へるものも亦之に基けるものなり。

更に言を進めて之を論ずれば、上述の如き現象界は是現象の當體そのまゝ宇宙の本體にして、現象を去つて外に中道實相の本體あらざるなり。智者釋して曰く、

諸法既是。實相之異名。而實相當體。又實相亦是諸法之異名。而諸法當體。妙有不可破壞。故名實相。(玄義八五十丁)

と。諸法の現象界は實相の異名別名にして、同時に實相の當體なり、而して實相も亦諸法の異名にして、同時にその當體なれば、實相と現象界は二而不二、無二無別なり。故に現象界と云ふも實相と云ふも、單に一實在の異號のみ。別名のみ。

かゝれば天台の實相は抽象的の實在を指すものにあらずして、現象の當體其のまゝを指せるものなり。故に天台の實相は具體的の事實なりと云へる、吾人の意も亦容易に知り得べきなり。

六、實相は抱括的なる事

吾人は既に實相は具體的事實なる事を述べたり。故に知りぬべし、現象界卽ち實相なる事を。更に是を推究する時は、實相は又同時に抱括的なる事に思ひ至るべし。何となれば現象界は雜多なり。萬差なり。其の雜多萬差を惣括して實相なりと云ふ。何ぞ實相は廣高ならずして可ならん。又抱括的なりと云ふべし。文に曰く、

無量義云。無量義者。從一法生。其一法者。所謂實相。(玄義八五十丁)

と。無量義は一實相より生ずと。之を轉換して云へば、一實相は無量義を生ずと、卽ち宇宙の森羅皆是れ實相なりと云へるものなり。更にその次に至りて、

多所含受。故名如來義(玄義八五十丁)

と云へり。萬象を含受するが故に多と云ふなり。多含の故に如來藏と云ふなり。如意寶珠のよく萬寶を雨らすにも比らべつべし。

因緣所生法者。卽徧一切處也(玄義一十丁)

と。實相の抱括的なる事知りぬべし。

吾人は實相を論じて屢々超判斷的、超認識的なりと云へり。されど前說の如く具體的なりと說明するときは、何等がその間に蹉跌の敢て生じ來るを覺ゆるものあり。何ぞや具體的事實は判斷し易く、認識に容易なるべければなり。是れ一言に價ある問題たるが如し。

されば具體的事實は認識し易し。眼前の事は凡智の及ぶ所にして敢て佛智●哲智を勞するの要もなかにべし。されど抱括多含的の具體的事實は容易に認識し得べからず、何者認識的判斷的智識は相待的のものにして、抱括的の具體的事實は絕對的存在なればなり。何ぞ相待智を以て絕對實相を識別し得んや。是を以て實相は超判斷的、超認識的の論理的存在なりと云ふなり。讀者は注意して考覈せよ。

七、實相は非道德的なる事

實相は論理的の歸結にして抱括的具體的の事實なれば、又同時に非道德的なるべし、何者具體的の事實中には善あると同時に惡あればなり。否な寧ろ善惡は人爲的人情的の命名にして、實相は本來として善惡に區別し得べきものなければなり。慈善事業は何故に善にして殺人罪は何故に惡なるや。是れ人類に對して前者はその生存を助け、後者はその生存を害するが故なりと答へざるべからず。而して必ずやその間に「人類に對して」

てふ假定を以て出立せざるべからず。故に若し此の假定を去るときは慈善事業と殺人事件と幾許の徑庭かある。何れも共に人爲的現象たる也。その價値に於ては同一なるべし。慈善事業を貴んで殺人事件を賤むの理あらんや。是れ恰も秋季に入りて山野の草木一陣の秋風に凋落するを惡んで、春●夏の頃萬花咲き亂れ、新芽綠なすを好むの愚と一般なり自然現象に於て何の差かある。好惡をなすが如きは人間の弱點を表白するまでにして、天然は宛然として自然なり。凋落繁茂何等の好惡の情を挾まざるなり。故に道德的善惡の評價の如きは、人間てふ假定の上に立てる相待的判斷のみ。

然るに實相は宇宙の所謂實相にして、何等の假定を有せず。自己自存的の根本實在なれば、從て上の如き道德的の評價を許さゞるなり。是を以て善惡不二、邪正一如などゝ云へるが如きは、正しく此の意味を表明せるものにして、具さに云へば、善惡●邪正の如き相待的言語の用ゆべきものなき事を云へるものなり。故に實相は宇宙の根本概念にして、非道德的なるものなりと知るべし。道德的の如きは下に至りて詳論すべければ、尙その時に至りて之を見るべし。而して善惡一如の如き證文多々にして、一般に云へる所なれば今は强て之れを擧げず。諒せよ。

八、實相は一元的なる事

以上の如く論じ來るときは、實相の正體は多元なるが如く見ゆ、されど實相は多元ならず。必ず實相てふ一元に歸り來るものなり。換言すれば實相は本來一元的のものにして、二となり三となり得ざるものなり。其の二と見、三と見、將た多と見る所以のものは人間の妄情認識の結果にして、純理的の實在そのものにあらず。故に天台の實相論は具體的の一元論なりと云ふべし。今その一元論たる所以の證文を二三列擧すべし。

譬如日月網天。公臣輔主。日月可二。大虛空天。不可二也。臣將可多。主不可多也。爲此義故。須簡出正體(玄義八三十一丁)

實相の名辭は萬多なりと雖、其の正體を簡出する時は、唯一なるべきものなる事を云へるものなり。その譬知りぬべし。

大經云。一實體者。則無有二。無有二故。名一實體。(玄義八三十八丁)

又曰く、

實相亦爾。同是一法。(玄義八四十七丁)

等の文は、正しく實相の一元的なる事を證せるものなり。更に面白き比喩を以て是を解すべし。

譬如一人。遭飢蒙禍。處々換姓。處々變名。如張儀范蠡之類。涉多官職。身備衆位。若從多技得名。書畵金鐵等師。若從文官。儒林中散。若從武官。熊渠次飛。隨處換名。譬名異。隨技得稱。譬義異。而體是一。更非異人。(玄義八五十二丁)

以て知るべし。實相は一元論的なる事を、而して上の譬喩說き得て當れりと謂ふべし。多言を要せざらん。

九、實相は宇宙の第一義諦なる事

實相は一元的なり。而して如來藏なり。萬法を含有して諸法を生せしむる根本たり。換言すれば宇宙の第一元理にして、他の言を以てすれば宇宙の第一義諦なり。故に天台は之を釋して、

最上無過。故名第一義諦(玄義八五十丁)

と云へり。最上無過、是れ第一義諦を說明せるに於て最も正鵠を得たりと云ふべし。此の義智者の自ら痛說する所なれば、一言附加するに留めてその餘は本論に讓る。

十、實相は非進化的なる事

第一義諦實相は宇宙の根本原理にして、非進化的のものたるなり。何故に非進化的なる也。是れ充分研究すべき問題たるが如く、然り。然れども吾人はその主要點を論ずるのみに留めて止まんのみ。

夫れ天台の根本概念實相は前來にも述べしが如く、龍樹以來實相論の歸結にして、實相論を極處に發展せしめたる學說なり、故に實相論の性質を尋求すれば、本質上進化的なる意義を含有せず。而して宇宙の變遷、進化發展の如きは、皆主觀の變化にして本體そのものゝ變化にあらずとなす也。故に今此の實相論の意義を發展して天台の實相論に至るときも、亦此の非進化的の意義を含有すべし、是れ非進化的なる語は、實相論と常に離るゝ事の能はざる概念なればなり。是れその天台の實相論を目して非進化的なりと論定せる論據の重なるものなり。

* * * * * * * * * *

吾人は十項に分析して天台の實相なる根本概念を批判し來れり。かく批判し見るときは略〻實相そのものゝ如何なるものなるやを了知するに足らん。若し之を一言に要約して云ふときは、圓教の圓の字を以て概括し得べし。而して此の如きは後章に至りて論ずる所あるべし。

第二十五章　根本概念の綜合的批判

吾人は前章に於て根本概念を分析して、その屬性特質とも思ぼしき概念を發見したりき。故に本章に於てはその諸概念を綜合して、最後の圓滿なる結果を惹起し來らんと欲す。

抑も分析と綜合とは全體相ひ異なれる概念なるが如く而して實は爾からず。是を事實に徵するときは同一結果となること多し。故に分析は綜合となり、綜合は分析となりて孰れが綜合か孰れが分析なるか、事實に於て定かならぬは反て事實の眞相なるが如し。今吾人は天台の根本概念を分析して要素的概念に還元せしめたりき。然りと雖之れを一面より見れば、かゝる要素的概念を根本概念に綜合したると同一の結果を來たせり。換言すれば要素を結合したるの觀あり。故に本章に於て更に綜合的批判として、別章を設くる事の反て不必要なるが如し。又事實に於て不必要なるものなり。されど說明の明瞭を得て完全を期するが爲めに、本章を設けて前章を再說せんとするに至れり。

されば天台の根本概念は龍樹以來の實相論の系統を引けるものにして、劈頭宇宙の最根底に直入してその根本概念を探求し、常に本體論的問題を上下しつゝありしなり。而して天台は實相てふ妙有的概念を得たるなりき。是れ古來の言語を以て說明するときは第一義諦とも呼ぶを得べし、宇宙解釋の最後の概念なればなり。

實相はそれ宇宙の根本概念にして第一義諦なりとせば勢ひ一元的ならざるべからず。是れ蓋し二元若しくは多元なるときは第一義諦となり、根本概念となる能はざればなり。

宜なり。天台は是を説明して一元論的となせり。至れるかな。既に一元的なりとせば人間的の云爲を許さゞるべし。即ち善惡●美醜の相對的説明を許さゞるべし。而してその結果は善、不善等の道德的評價を擺脱して非道德の存在となり。道德を超越するものとなるなり。之を自然の道理となす。既に道德を超越して善惡●美醜の評價を許さずとせば、根本概念の内容は實に抱括的なりと云はざるべからず。あらゆる萬物を一處に集めて之を可能ならしめ、消極●積極の原理を一切網羅して肯定●否定一として取捨せざるなり。既に爾かなり之を抱括的と云はずして何ぞや。かくの如く根本概念は、その内容抱括的なりとせば、勢ひその内容は具體的となるを見るべし、何となれば善もあれば惡もあり、蓮花もあれば穢泥もあり、菩提もあれば無明もあり、何一物として具備せざるものなければなり。かくて萬事を抱括して餘すものなしとせば、是れ正しく元理にあらずして事實なるべし。蓋し元理は事實の裡に存する抽象的概念なればなり。而して天台の根本概念は抽象的概念にあらざればなり。かくて終に天台の根本概念は最上具體の事實となりて、萬事を綜合抱括し、而も一元的の第一義諦となるに至れり。是れ既にかくの如しとせば吾人は如何にして之を論究すべきや。思辯推理の圈内に之を得んとするは甚だ謂れなき事となりぬべし。吾人の之を批判して論理の歸結となせる良に所以あるなり。杜口

絶歎の極となすべし。

實相は唯佛與佛の境にして杜口絶歎、文殊も尙默然せざるを得ざる底のものなれば、云何ぞ吾人の如き凡智の判斷に左右せられんや。吾人の相待的判斷を超越せる所に眞の實相は存在するものなるが如し。既に吾人の悟性形式たる判斷を超越すとせば、云何ぞ感性形式たる時間●空間の形式を超越せざらんや。かくて實相はあらゆる知識を超越して想外に超然するに至れり。之れを實相の超越性となす。

實相は絶對的判斷を超越してあらゆる現象界の雜多を抱括し、而も具體的の一元論なれば吾人は之を形容するに殆んど適當なる言語を有せざるなり。或は言語を有せざる所反て實相の眞相なるが如けんも、吾人はそれにて滿足すべからず。必ず何等かの語を用ひて其を彷彿せしめんとするは人心の常なり。玆に於てか吾人は種々穿鑿の結果「圓」なる一字を得たり。抑も圓とは「まどか」と和訓し、直ちに圓滿無疵なる事を聯想せしむるの文字なれば、實相は超判斷的卽ち絶待なるに於て圓なるべし。具體的抱括的なるに於て圓なるべし。又第一義諦●一元的なるに於て圓なるべし。換言すれば圓なるが故に實相は是等の概念を可能ならしむるものなり。天台之を稱して圓教と云ふ。誠に當を得たるの言となすべし。四教儀一に曰く。

圓以不偏爲義。此敎明不思議因緣。二諦中道事理具足不別。但化最上利根之人。故名圓敎。

と　圓以不偏爲義の一語說き得て全極を盡せり。事理具足して不二不別、上根の人にあらずんば以て入る事難かるべし。圓の一字を以て實相の義に通入すべし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

以上吾人は諸種の方面よりして圓敎實相の概念を說明し來たれり。今や本部を終るの運命に遭遇しぬ。回顧して所論を通覽するに意に滿てざるもの多々なり。改作修正せんと欲する事切なりと雖、時間の許さゞる所亦止むを得ざるなり。されどその解說思想に至りては毫も變化する事なければ、讀者は所論杜撰なりと云ふと雖、又以て吾人の意味しつゝある所を知るに足らん。願くば文章解說法の杜撰なるよりして實相の眞意を害せざらん事を。以て本部の結論となす。

第二部　認識論

第二十六章　總　論

されば認識論とは何ぞや。吾人は姑らく第一部の論理學に相待して用ひんと欲する所のものあり。ゆへに普通云ふが如き認識論●智識論などゝ多少その意を異にせるものと知るべし。而してその意味する所のものは前論理學にありては主觀●客觀、認識の形式を超越して、單に論理的實在の學なるが故に論理學と云へるに相待して、本第二部に論せんとする所の認識論は、凡て主觀●客觀の認識形式の上に成立せる實在、換言すれば普通に云ふが如き認識論は勿論の事、一般哲學說卽ち常途の本體論●宇宙論●自然哲學等と呼ばるゝものをも一切抱括し居るものなり。故に今用ゆる認識論とは、至つて廣義の用法なりと知るべし。

認識論の語義に付て詳說する事は之を措く。今直ちに天台の分類法に於て之を求めんか論理學は主として體玄義にありしが如く、認識論は主として名玄義にあり。夫れ名とは主觀的思想觀念の客觀的象徵にして、差別辨別の限界をなすものなり。故に文に曰く、

立名者。原聖建名。蓋爲開深以進始。咸令視聽俱得見聞。尋途趣遠而至於極。故以名名法。施設衆生（玄義一七丁）

と。蓋し名辭を假りて事物を區別するに視聽見聞に容易なり。否寧ろ容易に見聞覺知せる所以に、名を附して宇宙雜多の現象界を彌雜多ならしむるものなり。換言すれば主觀●客觀の對立を假定して、其の上に立ちて言辭、句節を施設するもの、之を認識論と云ひ名玄義と云ふ。

名玄義の立脚地にありては寰中を觀察すれば心、佛及び衆生の三法分類を得べし。されど是の分類は宗敎的側面に立て都合よき分類にして哲學的側面の分類と云ふべからず。衆生も佛も哲學的に攻察するときは何等差別なければなり。尙且つ心の一は兩者に共通的のものにして、特に抽出して一科をなすの必要なければなり。故に天台の名玄義を襲用しつゝも猶此の分類に依らざるべし。然らば吾人の說明法は云何。吾人は衆生の一法に他の二法を抱含せしめんとするものなり。その義何ぞや。曰く衆生法を攻究する時は佛法自らその中にありて蘊在せり。心法は兩者に共通にして、衆生の心法を攻究すれば佛の心法自ら明かなり。故に衆生法の一を研究して以て此の三法說明に代へむと。。

更に名玄義の下、衆生法の下にありて之を考覈するに、天台は尙之を十種に分類せり。其の十種とは何ぞや。曰く迹門の十妙是れなり。曰く、

迹中十妙者。一境妙、二智妙。三行妙。四位妙。五三法妙。六感應妙。七神通妙。八說法妙。九眷屬妙。十功德利益妙(玄義二四十丁)

と。此の十方面を以て因分衆生法卽ち迹門十相の義を說明するに、竭きて盡きざるはなかるべし。されど吾人は序論以降屢次論せし如く、吾人の研究は哲學的側面にありて宗敎的側面にあらざれば、從つて此の十妙の說明を天台は用ひたりと雖吾人は用ひざるなり。故に此の十妙を限定して最初の三妙のみを用ひんと欲す。蓋し此の三妙さへ是れある時は哲學的衆生は成立し得べければなり。卽ち主觀の智目●行足に依て境の上を濶步し得ればなり。哲學的衆生は極めて簡單なりと云ふべし。かくて吾人は本第二部の研究にありては、右の三妙を叙述するに止めんとするに至れり。

されば第一部に於て論じたる根本概念と、是等三妙との關係云何。而して是等三妙相互の關係云何。是れ惣てに先ちて論述せざるべからざる問題なり。故に吾人は順を逐ふて之れを述べ、次に三妙別論に入る事とせん。

抑も根本概念、絕待實相は主觀●客觀を超越して、超判斷的實在なる事は前部論理學の部に於て詳論したる所なりとす。今再び概說するに當りて玄義の本文を引用して之れに代えん。曰く、

圓敎若起。說無分別法。卽邊而中。無非佛法。亡泯淸淨。豈更佛法待於佛法。如來法界故。出法界外。無復有法。可相形比。待誰爲麁。形誰得妙。無所可待。亦無所絕。不知何名。强言爲絕。(玄義二三十六丁)

と。實相は具體的、抱括的の一元論にして、其の間何等の差別すべきなく相待すべきなし。渾然として法界實相なり。所謂不可說不可說の境なり。而してかくの如きは天台の

假定せる根本實在、宇宙實相にして是れ彼の一代學說の根底をなせるものなり。

されど斯くの如き渾然たる法界實相も、一度主觀・客觀、時・空の形式・範疇に適應するときは、宛然として法界萬差なり。卽ち因緣あるときは說く事を得べき相待の現象界として顯現し來るものなり。換言すれば吾人の容易に見聞覺知し得る實在となるなり。故に天台は之を名玄義の上の觀察となし、吾人は認識的見解となす。蓋し萬人共通に認識し得る實在なればなり。而して萬差各別の中にありて吾人が尤も初期に辨別する所以のものは自他の別是れなり。學術語を以て之れを云へば主觀・客觀の別是れなり。而して最後の分類も亦是れに歸するものなるが如し。

現今の心理學及び認識論の敎ゆる所に從へば、人生れて最初に識別し得るものは他なり。卽ち母親の存在を最初に意識するものなりと云ふ。而して其が漸次發達するに從ひ、母親と非母親とを區別し、非母親中に於ても父母兄弟等を區別し、草木國土等、自然界の雜多を先づ自己に近き方面より區別し來りて種々の觀念を作るに至る。かくて外界の觀念を有するに至るときは自ら自己意義を生じて、是の自己に對して彼は外界なりと認定するものなり。故に自然の結果として其の裡に自の存在を假定して、遂に自覺の域に達するものなり。茲に於てか自己と他界との對立を生じて、姑らく自己は他に征服せられ、

自然界支配の下に自己を置て滿足せんとす。されど一度自覺の意識强盛になりて、自己發展の運動を激甚ならしめんか。自己は躍如として立ち自然界を征服せずんば止まざらむとするに至る。かくて自己は遂に自然界征服の第一步として自然の研究を始め、自然を利用して自己の配下に拜跪せしめんと努むるものなり。然るに或るものは自然の廣大なるに恐れ、自己を自然の一員として、自然の腹中に吸收せらるゝものあり。之れを自然哲學者、三藏敎の一派となす。三藏敎の事は詳しく云ふの要もなかるべし。されど是の說にありては、自己は自然界の一現象なり。故に先づ自然界の研究を精密にして、而して自然の壓迫卽ち苦境を脫せんとして厭世的、身心都滅の解脫を求むるに至るものなり。然れども利根のものは是に留まらず。自然界の存在は自己存在の爲め也、自己の利用にまかせられたるもの是れ自然界なりと看破して、終に自己の外に自然界なしと、研究の中心點を自己に置て、精神の研究のみを是れ事とする一派あり。之を精神哲學者、通敎の學者となす。かくて差別界にありては常に是が對立をなして、偏自然的哲學と偏精神的哲學は絕へず古今東西の思想界に對立するの狀をなせり。恐らく此の兩傾向は、互にその理由と根據を有して一潮流となるの期なかるべし。否寧ろ此の對立こそ差別界、認識界の眞相なるべけれ。

若し之を一原理の元に說明し去らんとせば、第三の原理を誘導せざるべからず。而してその原理を是等二者の外に求めたるものを別敎となし、二者の中に內在的に求めたるものを圓敎となす。圓敎の根本原理の事は上に說くが如し。而して又下に說明すべし。

根本的統一原理は姑らく別として、差別現象界にありては、上の主自然系統と主我系統とが常恒に對立して永劫の對立なりとせば、吾人は此の兩者の研究を以て該本二部、認識論の研究の主眼點となさゞるべからず。之れを天台の分類に配當せば、境（卽ち客觀界）及び智（卽ち主觀界）の研究となるべし。而して境●智相ひ對立して合致する時は、運動を惹起して行を生じ玆に於てか始めて人事界を生ず。之れを認識論の極致となす。故に曰く、

實相之境。非佛天人所作。本自有之。非適今也。故最居初。迷理故起惑。解理故生智。智爲行本。因於智目。起於行足。目足及境。三法爲乘。乘於是乘。入淸凉池。登於諸位。（玄義二四十四丁）

と。是れに依て之を觀れば、境●智●行の三妙がその根底となり居るものにして、境妙卽ち主自然系統を第一に置くは、實相の妙境は是れ常住不思議の妙理にして、前述の根本概念、實相に特別密接の關係あるが故なり。卽ち諸佛の本師となればなり。此の義特に

天台に於て爾り。他の學派にありては眞如の空理に歸するが故に、かくの如くは說明し得ざらんも、天台の實相は具體的一元論なれば、特に境妙に多くの關係を有するものと知るべし。而してその境妙を顯すことは一に智妙ならずんばあらず。智妙は太陽の如く境妙は虛空の萬象の如し。智妙の光なくば差別の相を知るに由なし、卽ち根本概念の具體的なるを知るは一に此の智妙に由らずんばあるべけんや。諸德卽實相の理は一に是れが最上智の示す所なり。故に智を第二に置く。既に境あり智あり。その間に何等の變動なき勿からんや。境●智の併存は必ず運動を伴ふものなり。かくて行妙を生ず。卽ち人事現象是れなり。人事現象生ずるときはその上乘なるものを佛となし、理想境となし、その迷霧の間に沈在せるものを衆生となし現實となす。現實は須らく修行して理想境に到達せざるべからず。而して此等理想境及び現實の論は部を異にし編を別にして論ずべきものたり。故に今は取り敢へず上の三妙に付て論ぜんのみ。

更に注意すべきは境●智の二妙は根本概念に直接關係を有せるものにして、其の根底に於て認識形式を假定すると、否らざると大に異るものあるに關らず、其の議論往々にして相ひ接觸せるものあること是なり。而して此れをかく認識論●論理學と全然區別して論せんとせるものは、單に說明の便利なるを以てなり。換言すれば說明の便宜上かく分離

せしめたるまでにして、之れを事實上に論ずるときは何等區別すべきものなく、論理學的實在の現象せる實在を單に凡夫の所見、即ち主觀の認識形式(時●空)に應用して說明し易からしめたるものなり。故に之に宋儒の用語を假用すれば、擡起說の說明法を用ゆるは說明の便宜にして、その實相を論ずる時は混合說なりと知るべし。若し之を誤解する時は別敎所接の說となりぬべければ特に注意する事を要す。

第二十七章　客觀界の成立

吾人は前來の所論と均勢を保ちて、以下漸次說明評論し行かんと欲したりき。然れども既に本論文提出の期限切迫して、之れを一々研究し居るの暇を有せざれば、是より下は單にその骨組みをのみ述べて說明に代えんとす。諒察を賜はれかし。

認識は時間●空間の形式上に存在せる智識を云ふものなりとは既に前に述べる所なり。故に是の原則に又基づきて、先づ第一に客觀界の成立を論ずるもの是れ本章の目的なり。

而してその所論は所謂境妙の下の四諦●十二因緣を以て現象界の狀態を述べ、最後に無作の四諦及び眞俗二諦を以て根本概念、論理學と關係せしむるにあり。一々にして之れを云はゝ天台の緣起論●現象論を述べんとするにあり。

第二十八章　主觀界の成立

客觀界既に成立しぬれば、それに對する主觀の智識の成立を促がし來るは必然の結果なりとす。

茲に於て吾人は二十智の解說を施し現今の心理學に照して批判を試みんとするにあり。

第二十九章　有情界の成立

境妙の肉躰あり智妙の精神ありて兩者合一すれば茲に生物界を生ず。而して生物はその特質上種々の運動を生じて活動を起すに至るべし。その活動の歷程云はゝ生物進化の法則を論ずるもの本章の目的なり。

第三十章　結論

上の三章を三法妙の下、三軌に約して再說し皆根本概念實相の妙境を離れざるものなることを論ずるにあり。

第三部　佛陀論

第三十一章　佛教哲學史上に於ける佛陀論の位置

既に有情界成立しぬれば、直ちに道德論に移るは普通哲學の常なりとす。然るに佛教哲學史に限りて佛陀論てふ特に興味ある一問題を有する事を述べ、その哲學上に於ける位置を論評して有情の理想、卽ち行妙の極致をなすものなる事を說示するにあり、是れ本章の目的なり。

第三十二章　玄義に現れたる佛陀論

理想の佛陀を玄義の上より論ずるにあり。卽ち迹門十妙より轉じて本門十妙に到達する過程を示すにあり。換言すれば本因妙と本果妙との關係を論ずるにあり。而して天台の佛陀論は法身思想にある事を結論せんとするにあり。

第三十三章　文句に現れたる佛陀論

本章にありては文句、殊に壽量品の下を中心として四種釋の中、本迹釋の要文を蒐集して歸納的に前章の結論を立證するにあり。

第三十四章　天台學上に於ける哲學と宗教との調和

天台は佛陀論を以て哲學と宗教を遺憾なく調和せり。其れを評論するが本章の目的なり。換言すれば本迹の關係論にあり。

第四編　實踐哲學論

本編亦數部數章に別かちて摩訶止觀の說を說かんとするにあり。

第五編　雜論

本編を以て天台の念佛に對する思想、戒律に對する思想等の如き斷片的、特殊的思想、云はゞ思潮に對する彼れの意見を網羅せんと欲するなり。

第六編　餘論

本編に於て天台と花嚴との關係或は天台と老●莊との關係、或は天台と三論、若しくば四諦との關係、或は攝論●地論等との關係を論せんとするにあり。

第七編　結論

以上の諸說を結論して天台の死後、天台學派の變遷を辿るにあり。卽ち天台學の後世に及ぼせる影響を知らんとするにあり。

天台學　終

天台學の後に記す

本書は著者自ら屢〻書中に記せる如く、一箇年間の東洋大學研究科卒業論文にして未完成なり。全體の未完成なるが如く、修文措辭に於ても未だ熟せざる點頗る多し、是れ一に提出期限の切迫したるに依らんずんばあらず。

されど、著者自ら信ずる如く、其の思想及び體系に於て、大に獨創、大に卓見の存するあるを許さゞるを得ず。若し著者をして數年の壽を假さしめば、讀書界殊に哲學界に驚くべき貢献を爲せしや必せり。本宗の爲め、否、思想界の爲め、惜しみても猶ほ餘りありと謂ふべし。

猶、出版の事、非常に遲延し、最初の約に背くこと謝するに辭なし。加ふるに校正の大部分が、歳末及び年始に亘れる爲め、内外自他の煩らひあり。全編の調整、文辭の校誤等凡て意を滿たす能はず。一は故著者谷輝哲君に對し、他は讀者諸氏に對し、汗顔以て大に罪を待つ所以なり。後日好機を得て更に訂正するあらんことを期す。

終りに望み、本書の爲めに、題字及び序文を賜ひし文學博士前田慧雲先生、東洋大學長蟹野黄洋先生の厚意を感謝し、併せて出版後援諸君の厚誼を鳴謝す。

大正八年二月中旬

大獅子吼會同人識

大正八年四月廿日印刷
大正八年四月廿三日發行

（定價金壹圓五拾錢）

原著者　故　谷　輝　哲
編　者　東京市本郷區東片町九十四番地　藤　丸　哲　哉
發行者　東京市淺草區馬道町一丁目二十八番地　板　倉　泰　運
印刷者　東京市京橋　木挽町二丁目十三番地　新・井　由　藏
印刷所　東京市京橋區木挽町二丁目十三番地　合資會社　電　新　堂

不許複製

發行所　東京市淺草區馬道町一丁目二十八番地
大獅子吼會
振替口座東京二三一六六番
電話下谷二一一四番

8.11. 4

=1131

12

終